

第2節 複式学級における指導の在り方

1 複式学級における学習指導方法

(1) 直接指導と間接指導

① 直接指導

ア 直接指導とは

直接指導とは、複式学級の学習指導の展開過程で、児童が直接教師と対面して学習活動を進める指導形態であり、教師と児童が相互に情報を提供し合い、教師との深いかわりの中で、児童のより主体的な学習を促すことに意義がある。

イ 直接指導の在り方

直接指導は単式学級の指導形態と似ていても、実際には複式学級における要素が伴うので、そのことを十分認識しておくことが大切である。

複式指導においては直接指導に充てる時間に限りがあり、効率的な指導をしておかなければ単式学級の指導と同じ効果をあげることができない。

ウ 直接指導の留意点

- 1つの学年の直接指導に要する時間は、基本的には1単位時間の半分と考える時間を設定する。
- 直接指導の成否こそがまさに授業成否の鍵であるから、内容の精選や指導の重点化を図ることや、なるべく短時間で学習課題を把握させることが必要である。
- 一方の学年への「わたり」の時は間接指導になるので、次のことに配慮する。
 - ・何をどうするかを児童一人一人が把握すること。
 - ・間接指導の時間に耐えうる内容と量であること。
 - ・指示そのものに要する時間も考えておくこと。
- 間接指導との関連を考えた指導過程を工夫する。
- 2つの学年の教材研究や教材の準備をする。
- 2つの学年の座席、話合いのさせ方、グルーピングなど、人的・物的な指導形態を工夫したり、板書、教師の位置、態度、声量などを考慮したりする。

② 間接指導

ア 間接指導とは

間接指導は直接指導に対する言い方で、直接指導ができない学年に対して行う指導形態である。

また、直接指導を「学習の方法・条件」を共に考える時間とみたとき、間接指導は学習のねらいに迫る「児童の自力解決の場」である。

間接指導の意義としては、次のようなことがあげられる。

- 基礎的な学習方法の定着を図り、個人思考を深めたり、集団活動を充実させたりすることによって、自ら学ぶ力を育成することができる。
- 児童自身が自力解決を目指す学習であるため、自主性を養う絶好の機会となる。

イ 間接指導の在り方

間接指導は複式指導の特性の一つである。この特性をマイナスの要因としてとらえ、直接指導の谷間にあたる時間（練習や自習の時間）として使うことなく、児童の学習意欲を高め、自主的・協力的に問題解決に取り組む重要な時間と考えなければならない。

このような考えに立つと、次のような間接指導改善の視点が考えられる。

- 学習のねらい、内容、方法を明確につかませる。
 - ・ 何のために、どのようなことを、どのような方法で学習するのかを、一人一人にはっきりと理解させる。
- 学習の仕方を身に付けさせる。
 - ・ 学習の手順を明示し、反復練習させる。
 - ・ 教育機器の操作技能を身に付けさせる。
 - ・ 各教科の本質に立った学習の手順や方法を理解させる。
 - ・ グループ学習を成立させるために、ガイド学習の仕方を身に付けさせる。
- 学習の手引きや課題プリントを活用させる。
 - ・ 課題の内容に幅と深さをもたせる。
 - ・ 練習問題を準備する。
 - ・ 自己評価や相互評価ができるように準備する。
 - ・ 学習の補助資料を準備する。

ウ 間接指導の留意点

- 複式指導では、間接指導に伴い、自主学習の機会が多くなることや、短い時間での効果をあげなければならないことから、特に学習方法の定着が必要である。
- 直接指導から間接指導に移るときの手立てをとる。
- 間接指導の学習の様子を把握し、次の直接指導に臨む。
- 間接指導での学習内容を考慮の上、学習方法や形態を決める。
 - ・ プリント学習 ・ 学習者の位置 ・ 個別学習、集団学習

【ガイド学習】

1 ガイド学習とは

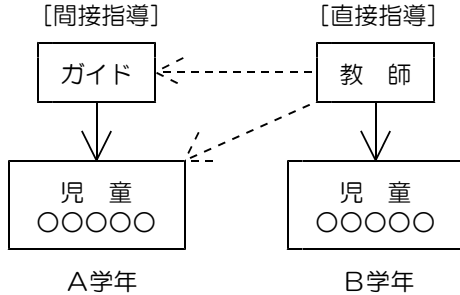
間接指導の効率化を図るために考え出された小集団学習の形態で、ガイド役の児童が教師の指導の下に立てた学習進行計画によってリードしながら、共同で学習する方法。

2 ガイド学習の特徴

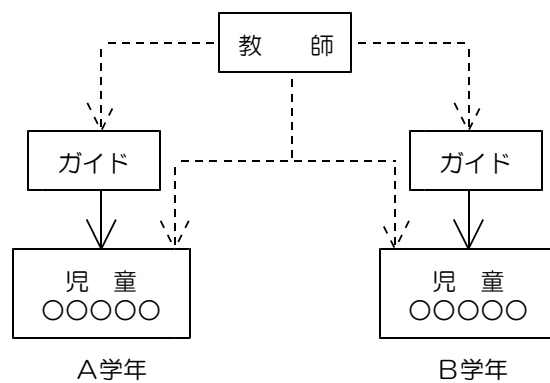
- 学習を効率的に進めることができる。
- 学習の手順や学び方をつかませ、主体的な学習態度を育成できる。
- 児童一人一人が認め合い、高め合う学習集団を組織することができる。

3 ガイドの位置付け

(1) 一斉指導の場合



(2) 個別指導の場合



4 ガイド学習の手引き例（算数科）

| | |
|---------|--|
| つかむ・見通す | <ol style="list-style-type: none"> 1 今日の学習をはじめます。 2 今日の日付けを記入し、ノートに線を引いていますか。 ・引いてなかったら引いてください。 3 今日の問題を読みます。 ・いっしょに読む。 4 意味の分からないところはありませんか。 5 分かっていることに _____、もとめることに ~~~~~ を引いて発表してください。 |
| 調べる | <ol style="list-style-type: none"> 1 何を使って解いたらよいと思いますか。考えてみてください。 ・〇〇さん、発表してください。 ・ほかにありませんか。 2 では、自分の考えた方法で調べてみましょう。 ・分からない人は教科書などを参考にしてください。 ・(まだできていない人に) 〇〇さん、あと何分くらい必要ですか。 3 できた人は発表ボードに書いて発表の準備をしてください。 |
| 深める | <ol style="list-style-type: none"> 1 自分の解き方を発表してください。 2 付け足しや別の考えはありませんか。 3 質問はありませんか。 4 今日の学習をまとめます。 ・〇〇〇は、□□□すれば解ける。いいですか。 ・〇〇〇は、□□□となっている。いいですか。 5 先生、お願いします。 |
| まとめる | <ol style="list-style-type: none"> 1 練習問題をします。 2 分かっていること、求めていることに線を引いて始めてください。 3 今日(昨日)の学習のまとめを使って解いてください。 4 できた人は発表してください。 ・発表ボードを使ってもいいです。 ・間違えた人はもう一度考えたり、友達に聞いたりしてください。 |

(2) 「わたり」と「ずらし」

① 「わたり」

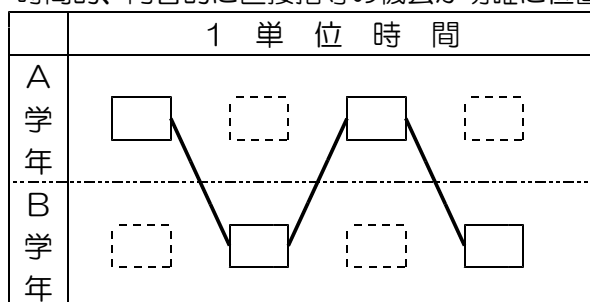
ア 「わたり」とは

直接指導と間接指導の組合せにしたがって、一方の学年から他方の学年へ交互に移動して直接的な指導をすることである。この学年間を「わたり歩く」教師の動きを「わたり」と位置付けている。ただ教師が移動しても学習者の方には直接には関係なく、その時の課題に集中していることが大切である。

イ 「わたり」の例

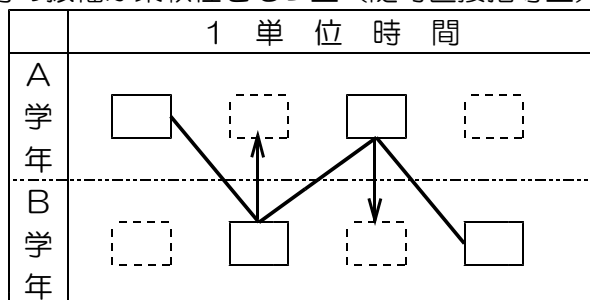
※ □ は直接指導、□ (点線) は間接指導、□ (点線) は同時間接指導、—— は教師の「わたり」を表す。

○ 時間的、内容的に直接指導の機会が明確に位置付けられている型（計画的直接指導型）



(例) はじめの10分で、A学年が算数の単元の導入をしていて、B学年が既習事項のミニテストをしているときのような場合。

○ 時間的、内容的には直接指導の機会が一応計画されているが、「わたり」の回数や指導の振幅が柔軟性をもつ型（随時直接指導型）

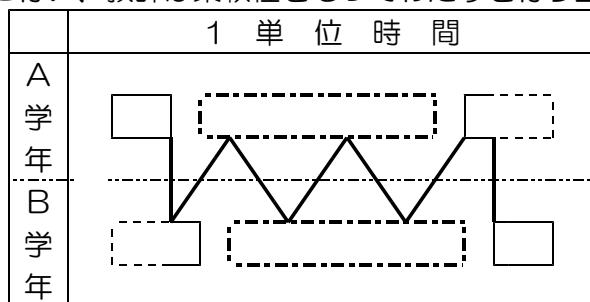


(例) 図工の絵の学習をしているときに、直接指導の計画はしているが、A・B学年のすすみ具合によって指導が必要な場合。

※ 「計画的直接指導型」と「随時直接指導型」の違い

基本的に直接指導の計画を立てて計画通りに指導を行うが、学習の進み具合に応じて一方の学年に「わたり」を行い、適切な指導を行う。

○ 導入とまとめの段階に直接指導を計画し、そのほかはガイド中心の間接指導を同時に行い、教師は柔軟性をもってわたりを行う型（同時間接指導型）

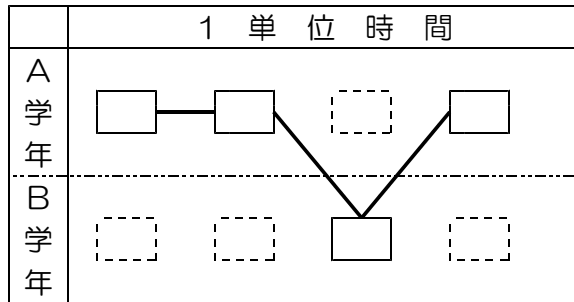


(例) A・B学年ともに国語の読み取りの学習で、ガイドが中心となってそれぞれ学習を進める際、どちらの学年も臨機応変に指導をする必要がある場合。

※ 「随時直接指導型」と「同時間接指導型」の違い

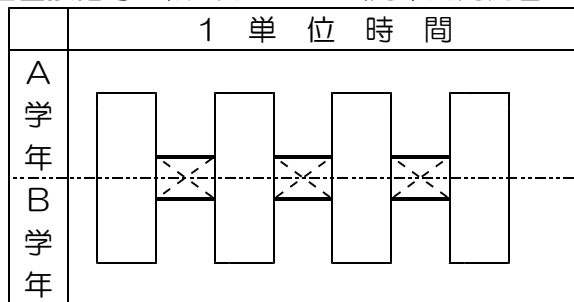
基本的にガイド中心の学習を進める。直接指導の計画は立てずに、学習の進行状況によって臨機応変に「わたり」を行い、適切な指導を行う。導入とまとめの段階で、直接指導を計画する。

- 一方の学年の直接指導に重点がおかれる型（1学年重点型）



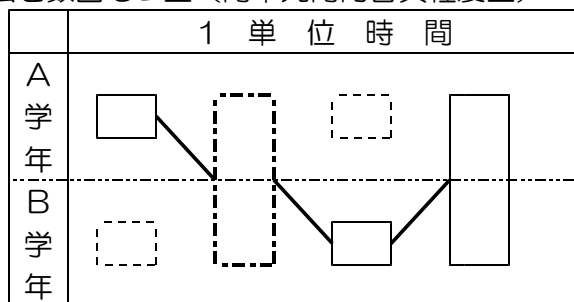
（例）A学年が算数の単元の導入をしていて、B学年がまとめの計算問題をしている場合。

- 同単元（題材）指導、主として同程度に近い指導の場合にとられ、必要に応じて適宜直接指導の機会をもつ型（同単元同内容型）



（例）A・B学年の算数の学習のねらいがほぼ同じで児童の実態も同程度の場合。

- 1学年重点型と同単元同内容型が組み合わせられ、主として学年ごとの直接指導の機会を数回もつ型（同単元同内容異程度型）



（例）体育のマット運動の学習の際、A・B学年でそれぞれ練習した後、発表の段階で一斉にそろい、お互いに学び合う場合。

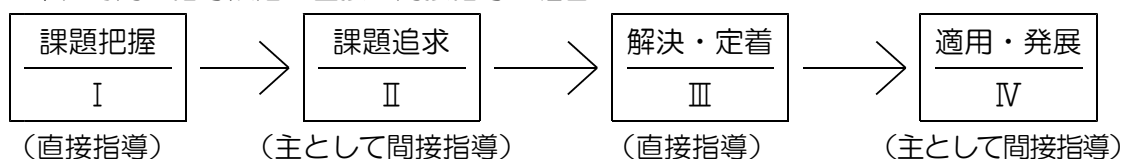
② 「ずらし」

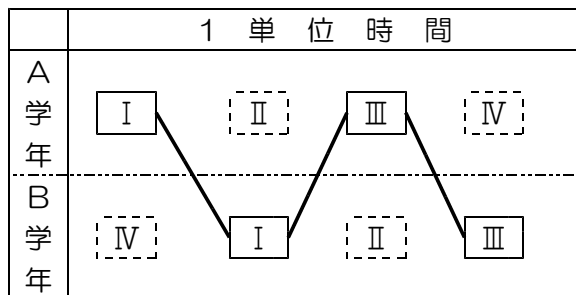
ア 「ずらし」とは

2つの学年を交互にわたり歩いて、直接指導と間接指導の内容を充実させ、学習活動を無理なく、効率的に行うようにするためには、どうしても指導段階を学年別に「ずらした組合せ」が必要になる。この組合せを「ずらし」という。

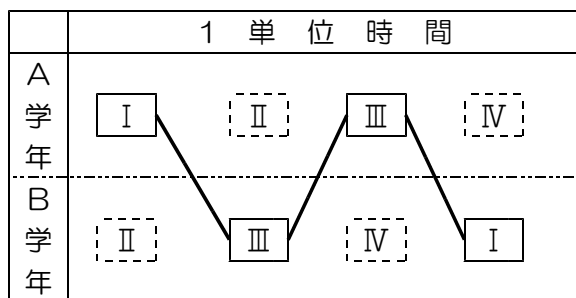
イ 「ずらし」の例

<1単位時間の指導段階と直接・間接指導の組合せ>

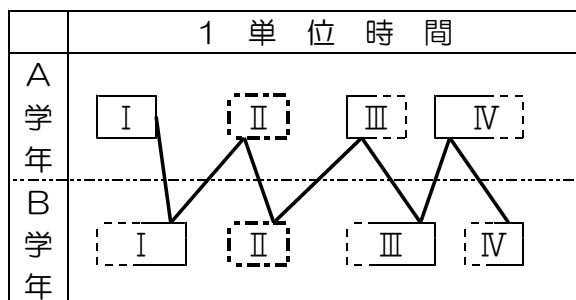




(例) A学年が直接指導で課題設定をしている間に、B学年は児童だけで前時の適用問題などの復習をする。その後、本時の課題設定をする形式である。
 ※ 最も多く用いられる形式である。



(例) 前時の最後に本時の課題を設定する。本時になるまでに、児童は、課題の追求をする。家庭学習との関連で効率の高いものとして意図的に組み合わせる。



(例) 同時導入でA・B学年ともに1単位時間完結型で授業を行う形式である。同時間接指導の時間が多くなるため、ガイド学習で1時間進めていけることが条件となる。

2 各教科等の指導計画作成上の留意点

(1) 国語科

- 国語科の全体計画については、学校の教育目標や教育活動と国語科における指導内容との関連を考慮して、言語の教育としての立場を一層明確にした計画を作成することが望ましい。
- 学年別指導を行っている複式学級の「話すこと・聞くこと」に関する指導においては、言語能力を育成するために、2学年合同で表現活動を行う場を設けるなど弾力的な指導計画を作成する。

(2) 社会科

- 二本案の指導計画を作成するにあたって、第3学年及び第4学年については目標及び内容を2学年にわたって示してあるので、この趣旨を生かして、積極的に指導計画に反映させ、指導時数にも留意する。第5学年及び第6学年についても系統性や児童の発達の段階を十分考慮して、弾力的な指導計画を立てる。
- 第3学年及び第4学年について、学習の対象や事例が選択的な取扱いになっているものは、児童の発達の段階や地域の実態を踏まえ、一本案的な取扱いをすることも可能である。

(3) 算数科

- 算数科の学習においては、近年、学年別の指導類型をとっている学校が多い。算数科の場合、系統性が重要視されるので、同単元異程度で指導計画の全体を構成するのは単元の構成や指導方法から見て難しい。そこで、部分的にはあるが、両学年の内容が一部共通、他の大部分は類似する内容を明らかにしながら、同単元異程度の指導計画を模索していくことが望まれる。
- 学年別指導をする際には、「わり」や「ずらし」の在り方が重要となってくる。さらに複式指導においても作業的・体験的活動などの算数的活動を積極的に取り入れながら個人差に応じた指導をしていく必要がある。

(4) 理科

- 理科においては、二本案の指導類型が多いが、目標が学年別に示されているので理科の系統性と児童の発達段階を考慮して、指導計画を作成していかなければならない。また、飼育や栽培活動等の生物分野での継続観察教材のように長い期間をかけて学習活動を展開するもの等は指導内容の特質を生かした多様な取り上げ方が考えられる。

(5) 生活科

- 生活科の指導は生活科の目標が2学年共通の目標として示されていることから二本案と折衷案の指導類型を含む方式を採用している学校が多い。入学時や学年末においては、児童の実態を考慮し、内容を工夫したり、次年度への準備をしたりするなどの学年別指導も考えられる。
- 指導計画作成に当たっては、2年間という見通しの中で、児童が身近な人々、社会及び自然と直接かかわる活動や体験を一層多く取り入れるようにする。その際、児童の活動にふさわしい学習環境の把握とともに、効果的な活用を指導計画に位置付ける必要がある。

(6) 音楽科

- 児童の実態や学習意欲を生かす指導計画を作成する。学校や地域の実態に配慮しつつ、一人一人が生きる題材の設定と配列、教材の選択を行う必要がある。
- 指導計画作成に当たっては、目標及び内容が2学年まとめて示されていることを考慮する。完全一本案の指導類型で実施している学校が多いが、学習を継続的、発展的に行うことにより、音楽を愛する心情や音楽に対する感性が徐々に身に付いていくので、いずれの学年でも素材や題材を変えて指導する内容を検討することが望ましい。
- 合奏や合唱においては集団での演奏により、音の重なりや和声の響きも可能となるものであるから、全校合同音楽的な取り扱いも考えられる。その際、学校の実態に応じた題材の選定やパートの分担を行って計画することが望ましい。

(7) 図画工作科

- 指導計画作成にあたっては目標のとらえ方、内容の取扱い方、程度のおさえ方、施設・設備や材料・用具の活用を十分考慮する必要がある。
- 地域や学校のよさを生かした素材を取り上げたり、共同して作りだす活動を取り入れたりするなど、作りだす喜びを味わえる指導計画を作成する。
- 児童の実態に応じた学習活動の工夫をするとともに、工作の時間を十分確保し、領域間や低学年の生活科をはじめとした他教科との関連を図る効果的な指導計画を作成する。

(8) 家庭科

- 指導計画を作成する場合、まず、2学年で取り扱う内容について、その系統性、発展性を考慮して、同内容として取り扱ってよいものなどを検討する。

(9) 体育科

- 運動に関する指導では、地域や学校、児童の発達段階を考慮し、児童自らが運動の課題解決を目指せるよう、合同学習等の形態や単元配当時数、配列及び内容などを弾力的に工夫し、領域として調和のとれた指導計画を作成する。

第3節 学習指導方法の工夫・改善

各学校において、学習指導要領が目指す教育の実現を図るため、児童一人一人のよさや可能性を生かすことを根底に据え、児童が自ら考え、主体的に判断し、表現したり、行動したりすることができる資質や能力を身に付けることを重視して、学習指導を構想し展開することが求められている。

複式指導においては、児童一人一人にきめ細かな指導が可能であるという少人数の特性を生かした魅力ある授業づくりを進めることを重視するとともに、思考力や表現力、社会性などを育成するための学習活動の工夫・改善を行い、児童一人一人のもつよさや可能性を把握し、個に応じた指導の改善を図ることが大切である。

1 創意工夫のある授業の創造

(1) 学校の教育的課題の解明を図る授業の構想

複式指導を進めるに当たっては、学校や児童、家庭、地域社会の実態を明確に把握することが大切である。その上で、それぞれが抱える課題の解明を図る視点から指導目標や指導内容を重点化し、指導計画及び指導方法の改善に努めるようにする。

(2) 各教科等の特質やねらいに即した指導内容の重点化と具体的な指導計画の作成

2つの学年が同時に学習を進める複式の指導においては、学習活動の場や内容、あるいは教師の直接指導が限られていることなどから、各教科等の内容の重点化や教材の精選に努めるとともに、上・下両学年の指導の系統性、発展性及び児童の能力・適性を考慮し、児童がゆとりをもって充実した学習ができるように、学年別指導や同単元指導などの計画を作成する。また、2学年まとめて目標や内容が示されている教科の指導計画作成に当たっては弾力的な取扱いを考慮する。

(3) 課題把握（第1段階）の充実

複式指導では、課題把握の段階を授業の成否を左右する重要な段階と考える。この段階で、しっかりした解決の方向付けを行うことが、間接指導(自力解決)での活動を成立させる。

そのためには、問題提示の後、まず結果(答え)の予想をしたり、解決の方法や手立てを考えたりさせる。このような見通しの段階を充実させることが大切である。そして、児童に本時のめあてを設定させ、学習課題の焦点化を図る。

ただし、第1段階以後の学習時間を確保するために、教師は発問を精選し、できるだけ短時間に課題把握の段階を終えるよう留意することが大切である。